

平成16年(2004年)7月28日

長野県病虫害防除所

# 病虫害発生予察特殊報 第1号

害虫名 チビクロバネキノコバエ

学名 *Bradysia agrestis* Sasakawa

## 1 発生作物 いちご

## 2 発生経過

チビクロバネキノコバエは、県内では施設栽培のトルコギキョウ等で育苗期間中を中心に発生していたが、被害は軽く問題となることはなかった。平成16年1月上旬、南信地区の施設栽培いちごで本種による被害の発生を県内で初めて確認した。発生ほ場はロックウール培地を使用した養液栽培で、20aハウスのおよそ3分の1の面積で生育障害が発生した。

いちごでの被害については、これまでに三重県(平成10年)で特殊報が発表されている。

## 3 形態

ハエ目クロバネキノコバエ科。成虫は雄が体長1.2~1.3mm、雌が1.1~2.4mm、頭部は黒色、胸・腹部は暗褐色、翅は褐色を帯びた透明で、見た目はハエと言うよりも蚊に似ている。幼虫は体が半透明で頭部は黒色、老熟すると体長約4mmになる。

## 4 生態と被害

成虫は有機物に誘引され産卵する。幼虫は本来、半分腐植化した有機物をえさとし、未熟堆肥等に発生した後に植物体を食害する。幼虫の生育適温は18~20℃と低く、低温期に多発することが多い。25℃では約15日で1世代を経過する。

いちごでは、幼虫が根やクラウン部を食害する。初め、日中の高温時等に葉が萎凋し、時間の経過に伴い下葉から徐々に枯れて、果実の肥大や新葉の生長が停止する。いちごではロックウール栽培に限って被害が問題になっている。

加害作物は多種類にわたり、いちごの他に鉄砲ゆり、りんどう、カーネーション、ペゴニア、トルコギキョウ、パンジー、宿根かすみそう、うど、ふき、なす、きゅうり、メロン、やまのいも、さといも、こんにゃくなどが知られている。

## 5 防除対策

- (1) 本種の登録農薬はいちごにはないため、次の(2)~(4)を励行し、発生予防に努める。
- (2) ロックウール栽培は、他の栽培方法に比べて本種の発生を招きやすいと考えられる。さらに、有機質資材の培地への施用は、成虫の誘引や産卵を促すので、これらの栽培方法を用いる時は、ほ場内外の衛生などに留意し、本種が飛来しないように充分注意する。
- (3) 施設内での発生源は、苗からの持ち込みや野外からの飛来と考えられるので、健全な苗を使用し、開口部には1mm目以下の寒冷紗を張る。
- (4) 発生したほ場では、収穫終了後、ロックウール培地から栽培株を除去する際に、根部等の残さができるだけ残らないように取り除く。さらに、培地の消毒や乾燥は、残った幼虫を絶やすのに有効と考えられる。

## チビクロバネキノコバエ写真

(写真提供:写真1 中込暉雄氏 元愛知県農業総合試験場弥富農業技術センター所長、写真2~4 長野県南信農業試験場病害虫土壤肥料部)



写真1 チビクロバネキノコバエ成虫(走査電顕)



写真2 チビクロバネキノコバエ幼虫



写真3 幼虫により根やクラウン部が食害された被害株



写真4 欠株が目立つ被害発生ほ場